

## [課題演習報告]

# 児童の学校適応感を高める若年教員の学級経営力の向上 —児童の自発的、自治的な活動の充実に向けたコンサルテーションを通して—

吉 丸 一 樹  
Kazuki YOSHIMARU

福岡教育大学教育学研究科教職実践専攻スクールリーダーシップ開発コース  
学校適応支援リーダープログラム  
糸島市立波多江小学校

(2024 年 1 月 10 日受理)

本研究の目的は、若年教員に特別活動の学級活動(1)（以下、学活(1)）における自発的、自治的な活動の充実に向けたコンサルテーションを通して、若年教員の学級経営力を向上させ、児童の学校適応感を高めることである。そのために行ったことが、①3箇所に位置付けたコンサルテーション、②学級会セルフチェックシートの活用、③学級会デジタルコンテンツの活用、④進捗状況の報告の設定、⑤相互評価の設定、⑥朝の会・帰りの会研修の実施である。また、コンサルテーションの効果をカークパトリックモデルを参考に分析を試みた。カークパトリックモデルとは、教育の効果を反応、学習、行動、結果の4段階で表すものである。3箇所にコンサルテーションを位置付けたことで、若年教員は、児童の自発的、自治的な活動が充実する指導を実践し学級経営力を向上させた。その結果、児童の学校適応感を高めることができた。

キーワード：学校適応感、若年教員、学級経営力、自発的、自治的な活動、コンサルテーション

## 1 問題と目的

### (1) 主題設定の理由

#### ①社会の要請から

近年の教員の大量退職、大量採用により、先輩教員から若手教員への知識・技能の伝承がうまく図られていない状況がある（文部科学省, 2016）。令和2年度の福岡県教育庁福岡教育事務所の「教育調査報告書」には、本県も大量退職・大量採用の影響を受け、教職員の低年齢化が進むと明示されている。学校現場では、このようなことから、若年教員がベテランの教員から学級経営に関する適切なアドバイスを受けられず悩んでいる状況が見られる。学校現場のこのような課題を克服するためには、若年教員が、児童にとって安心できる学級づくりを行うことが喫緊の課題である。

#### ②在籍校の実態から

在籍校でも2022年度は6名の初任者が採用された。初任者から採用3年を経過した教員が全体

の25%に当たる。2021年度1月に在籍校で行った「子供の生活アンケート」の中の「自分のいいところを見つけることができ、自分のことが好きだ」という質問の結果で、「自分のことが好きだ」と答えた児童の割合が7割以下になっている。この傾向は学年が上がるにつれて顕著に現れ、本校児童に、自分や友達のよさや頑張りを相互に認め合う教育活動の必要性を感じる。職員にも2021年度、「係活動に関するアンケート」を実施したところ、当番活動の意義や係活動の意義を理解していなかったり係活動を行っていなかったりする学級もあった。学級目標が児童に浸透していない学級も多くあり、児童の自発的、自治的な活動を学級経営の充実のための方策とせず教師がコントロールする傾向の強い学級経営が行われていることが見えてきた。

### (2) 研究主題の意味

主題に示した「学校適応感」とは、学校生活に対する満足度や帰属意識を要因とする、児童生徒の主観的な心理状態のことである（石田, 2009）。

本研究で対象とする「若年教員」とは、在籍校の初任者から採用3年目までの教員である。「学級経営」とは、学級の教育目標を達成するために、担任教師が行う意図的・計画的な営みである（林，2011）。「学級経営力の向上」とは、若年教員が学習指導要領第6章第3－(3)に示された「児童の自発的、自治的な活動を中心とした学級経営の充実」を実現して、児童一人一人の学校適応感を高めるようにすることである。副主題に示した「コンサルテーション」とは、「異なる専門性や役割をもつ者同士が児童の問題状況について話し合うプロセス（作戦会議）」（石隈，1999）と定義されている。本研究では、特別活動の研究団体に所属し、特別活動の研究に長く取り組んできた報告者が学級経営の推進者である学級担任に対して、児童の問題状況について話し合い、自発的、自治的な学活(1)にするための具体的な指導内容についてコンサルテーションを行う。学習指導要領に示された「自発的、自治的な活動を中心とした学級経営の充実」は学級経営を充実させるための具体的な方策である。学級活動の自発的、自治的な活動とは、学活(1)の活動形態である話し合い活動や係活動、学級集会活動を自分たちで考え実践する活動にすることである。

### (3) 研究の目的

本研究は、若年教員に自発的、自治的な活動の充実に向けたコンサルテーションを行うことを通して、若年教員の学級経営力を向上させ、児童の学校適応感を高めることを目的とする。

### (4) 研究の仮説

若年教員に児童の自発的、自治的な活動を推進する方向でコンサルテーションを行えば、若年教員の学級経営力が向上し、児童の学校適応感を高めることができるだろう。

### (5) 具体的方策

①学活(1)の学習過程にコンサルテーションを位置付ける（図1）。

学活(1)の学習過程において、コンサルテーショ

ンを3箇所位置付ける。コンサルテーションⅠでは、学活(1)の学習過程を確認し、今後の指導の見通しがもてることをねらいとする。コンサルテーションⅡでは、児童の実践意欲を高める指導を身に付けることをねらいとする。コンサルテーションⅢでは、児童の振り返りに向けて振り返りカードの内容や方法を理解することをねらいとする。

### ②学級会セルフチェックシートの活用

学級会セルフチェックシート（野中，2021）とは、教員が学活(1)に関する実践的な指導方法について自己評価するためのツールである。

### ③学級会デジタルコンテンツの活用

学級会デジタルコンテンツ（脇田・野中，2021）とは、小学校教員の学活(1)の指導法に関する学びを支援するためのツールである。

### ④進捗状況の報告の設定

学級のみんなで取り組んでいく過程を大切にするために、学級会で決定して実践までの期間に係ごとの進捗状況の報告を毎日行う。具体的には、毎日の帰りの会でその日の係ごとの活動を振り返り、仕事の進み具合やメンバーの頑張りを報告し、学級全体で活躍を認め合う場にする。

### ⑤相互評価の場の設定

児童一人一人の頑張りを認め合うために、実践後の振り返りの時に行う。具体的には、個人で振り返った後に、係ごとに振り返りを交流することで、頑張りを認め合うようにする。

## 2 研究Ⅰ

### (1) 目的

報告者が若年教員Aの学級経営力の向上を目指した児童の自発的、自治的な活動の指導に関するコンサルテーションを行い、児童の学校適応感の向上とコンサルテーションの効果・学級経営力の向上を明らかにする。

### (2) 方法

①研究期間 20XX年11月～20XX年12月

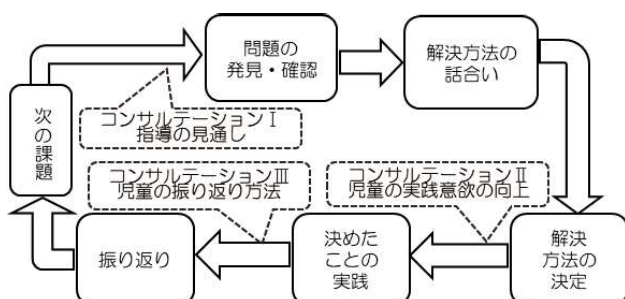
②研究対象 第6学年X組児童42名  
学級担任である若年教員A

③測定内容 表1を参照

表1 本研究の効果検証の内容・方法・時期

| 対象者  | 測定内容         | 測定方法              | 時期    |
|------|--------------|-------------------|-------|
| 児童   | 学校適応感        | 学校環境適応感尺度（ASSESS） | 取組の前後 |
| 若年教員 | コンサルテーションの効果 | カークパトリックモデル       | 取組中   |
|      | 学級経営力        | 記述アンケート           | 取組後   |

図1 本研究におけるコンサルテーションの位置づけ



### (3) 研究の実際

本研究では、児童個人の情報公開は行わない。研究内容の公開にあたり、在籍校の校長の承諾を得ている。また児童が行うアンケートや振り返りで個人名が第三者に特定されることがないことを確認している。

本研究におけるコンサルテーションの効果検証をカークパトリックモデルの手法を参考に分析を試みた。カークパトリックモデルは、1975年にアメリカの経済学者カークパトリックが提唱した研

修効果評価法のモデルである。研修による受講者の満足度・理解度だけでなく、行動変容・業績の向上度までを評価できる(表2)。そのため、日本の企業でも人材育成研修で広く普及している。本研究では、報告者が行うコンサルテーションⅠ・Ⅱ・Ⅲの内容に、若年教員が、どのような反応(満足度)をし、どんな学習(理解度)をしたのかをインタビューや記述テストで確認した。また、児童にどのような指導(行動変容)をしたのかを行動観察やインタビューで確認した(表3)。

表2 カークパトリックモデルに基づくコンサルテーションの効果検証の内容と方法、時期

|    | 評価内容     | 評価方法              | 評価時期         |
|----|----------|-------------------|--------------|
| 反応 | 若年教員の満足度 | インタビュー            | コンサルテーション直後  |
| 学習 | 若年教員の理解度 | インタビュー・レポート       | コンサルテーション直後  |
| 行動 | 若年教員の行動  | インタビュー・行動観察       | 取組期間中        |
| 結果 | 児童の学校適応感 | 学校環境適応感尺度(ASSESS) | コンサルテーションの前後 |

表3 「笑顔いっぱい週間の取組」におけるコンサルテーションⅠ・Ⅱ・Ⅲのねらいと若年教員Aの反応・学習・行動

|     | コンサルテーションⅠ  | コンサルテーションⅡ  | コンサルテーションⅢ   |
|-----|---|---|--|
| ねらい | 若年教員Aが、学活(1)の学習過程を確認し、今後の指導の見通しがもてるようにする。   | 若年教員Aが、児童の実践意欲を高める指導を身に付けるようにする。  | 若年教員Aが、児童の振り返りに向けて、振り返りの内容や方法を理解する。  |
| 内容  | ①若年教員Aの実践的指導力を把握するための「学級会セルフチェックシート」の実施<br>②児童の問題意識を高めるための学級目標の現状分析の提案<br>③学級会の基本的な進め方を理解するために、学活(1)の学習過程を「学級会デジタルコンテンツ」で視聴   | ①児童の学校適応感を把握するために、ASSESS(取組前の11月)の結果を共有(生活満足感、教師サポート、友人サポート、向社会スキル、非侵害的関係の低い児童を中心に)<br>②実践の充実に向け、係ごとの進捗状況を帰りの会で毎日報告することの提案  | ①自分や仲間の頑張りを認め合うために、係ごとに相互評価を行うことを提案<br>②学級がレベルアップしたと思うことを自由記述させることの提案  |
| 反応  | ・学活(1)の指導は、低学年「先生と一緒にする」、中学年「友だちと協力する」、高学年「自分たちで実践する」を目標にするということが印象に残った。<br>・学活(1)の学習過程が理解でき、学級会の基本的な流れや指導の見通しがもてて満足。<br>・学級目標の現状分析には、タブレットを使ったアンケートができそう。<br>・特別支援学級在籍の3名の児童も学級の一員として活躍させたい。                         | ・ASSESSの結果と一緒に確認したことで、学校生活や仲間とのかかわり方に課題がある等、自分の見えていないことが理解できて満足。<br>・帰りの会で進捗状況の報告をするという指導を、今までできていなかった。係活動が活発になりそう。<br>・「笑顔いっぱい週間」に向けて係ごとに仕事をしている様子をタブレットで記録して報告させたい。 | ・係ごとの相互評価を行うことで、児童に満足感や充実感が生まれそう。<br>・これまでタブレットに記録した写真を活用していきたい。<br>・今まで、学級がレベルアップしたことを書かせたことがないので挑戦してみたい。   |
| 学習  | ・児童の問題意識を高めるために、学級目標の現状分析を、タブレットを使ったアンケート結果からを引き出そう。<br>・学活(1)の学習過程では、実践が一番大切に児童が一番伸びるし活躍できるのだ。<br>・自発的、自治的な活動を充実させるために、児童に任せることや考えさせること、活躍の場を与えることを行いたい。   | ・児童同士がよさや頑張りに気づき、実践意欲を高めるために、帰りの会で係ごとの進捗状況を報告する場を設定していきたい。その際、教員の立場からも価値づけを行っていこう。<br>・「何のために」を見失わないようにするために、定期的に学級目標の一つである「みんな笑顔」のために行っていることを確認させたい。                 | ・一人一人の頑張りを認めるために、個人で振り返りカードに記入した後、係ごとに振り返りを行わせ相互評価を行っていこう。<br>・一人一人の頑張りを認めて学級がよくなったことを実感させるために、学級がレベルアップしたことを記述させて、学級のみんなで共有しよう。   |
| 行動  | ・学級目標の現状分析を行うためのアンケートをGoogleフォームで作成した。<br>・学級会を児童の力で運営させるために、計画委員会に学級会当日のシミュレーションを2回程度行わせた。<br>・特別支援学級の児童も同じ学級の仲間として計画委員会の仕事を理解して行ってほしいという思いから、黒板記録にするよう計画委員会に提案し、認められた。<br>・ICTの指導に長けているという強みを生かし、学級会ノートもタブレットで作成した。 | ・児童同士が頑張りを認め合ったり実践意欲を高めたりにするために、係ごとの進捗状況の報告を帰りの会で毎日行った。<br>・学級のみんなで頑張りを共有するために、児童の活躍の様子を写真に撮り、教員も児童の頑張りを帰りの会で紹介した。  | ・一人一人の頑張りを認めるために、個人で振り返りカードに記入させ後、係ごとに振り返りを行わせ相互評価を行った。<br>・振り返りの際は、タブレットに記録した写真を示しながら、これまでの活躍の場面を想起させた。<br>・一人一人の頑張りを認めて学級がよくなったことを実感させるために、学級がレベルアップしたことの記述を全体で交流し共有させた。 |

#### (4) 研究Ⅰの結果と考察

##### ①コンサルテーションの効果

###### ア コンサルテーションⅠ

コンサルテーションのねらいは、若年教員Aが、学活(1)の学習過程を確認し、今後の指導の見通しがもてるようにすることである。反応段階では、若年教員Aは「学級会の基本的な流れや学活(1)の学習過程を理解することができて、指導の見通しがもてて満足だ。」と答えている。「学級会セルフチェックシート」での自己評価と、「学級会デジタルコンテンツ」を視聴して児童に指導すべきことを確認したことが効果的だったからだと考える。学習段階では、若年教員Aは、「児童に任せることや考えさせること、活躍の場を与えることが大切だ。」と答えている。これは、若年教員Aが、児童が中心となって学級をよりよくする自発的、自治的な活動の教育的な意義を理解したからだと考える。行動段階では、若年教師Aは、学級目標の現状分析をGoogle フォームで行うために、4件法のアンケートを作成した。これは、児童の問題意識を高めることの大切さを確認するとともに、問題意識を高めることが、今後の実践意欲にも繋がると考えたからである。このことから、報告者が若年教員Aに行ったコンサルテーションⅠでは、学活(1)の学習過程を理解させ、今後の指導の見通しをもたせることができたと考ええる。

###### イ コンサルテーションⅡ

コンサルテーションⅡのねらいは、若年教員Aに児童の実践意欲を高める指導法を身につけさせることである。反応段階で若年教員Aは「ASSESSの結果を一緒に確認したことで、学校生活や仲間とのかかわり方に課題がある等、自分の見えていないことが理解できて満足だ。」と答えている。これは、若年教員Aの思っていたASSESSの個人結果と実際の結果にズレがあったからだと考える。学習段階では、若年教員Aは「児童同士がよさや頑張りに気付き、実践意欲を高めるために、帰りの会で係ごとの進捗状況を報告する場を設定する。その際、担任の立場からも価値づけを行っていく。」と答えた。これは、若年教員Aが、学活(1)の学習過程の中で、実践の時の児童の活躍の大切さを理解したからだと考える。行動段階では、若年教員Aは、学級のみinnで頑張りを共有するために、児童の活躍の様子を写真に撮り、帰りの会で紹介した。これは、若年教員Aが、児童の学校適応感を高めるためには、教員からの承認も大切だと考えたからである。このことから、報告者の若年教員Aに対するコンサルテーションⅡは、児童の実

践意欲を高めようとする指導力を身に付けることができたと考ええる。

###### ウ コンサルテーションⅢ

コンサルテーションⅢのねらいは、振り返り活動における振り返りカードの内容や方法を理解させることである。反応段階では、若年教員Aは、「係ごとの相互評価を行うことで、児童に満足感や充実感が生まれそうだ。」「これまでタブレットに記録した写真を活用していきたい。」と、期待や実践への意欲を語っている。これは、若年教員Aがこれまでの取組に手応えを感じているからだと考ええる。学習段階では、若年教員Aは、「一人一人の頑張りと努力で学級がよりよくなったことを実感させるために、学級がレベルアップしたことを記述させて、学級のみinnで共有する」と答えた。これは、若年教員Aが、児童の学級への貢献を実感させる大切さを理解したからだと考える。行動段階では、若年教員Aは、係ごとに相互評価を行った。その際、タブレットで撮影した写真を活用するようにした。これは、若年教員Aが児童により具体的な場面を想起させ、自分のよさを実感させることができると考えたからである。このことから、報告者が若年教員Aに行ったコンサルテーションⅢでは、振り返りの内容と方法を理解させることができたと考ええる。

##### ②ASSESSの結果の変容より

表4より、全ての因子で高まりが見られた。それぞれの結果の差異を比較するため、対応のあるt検定を行ったところ、「生活満足感」「教師サポート」「友人サポート」「向社会スキル」「学習的適応」「教師サポート」に有意差な高まりがみられた。「友人サポート」「向社会的スキル」が高まったのは、係ごとの進捗状況の報告を毎日の帰りの会で行い、よさや頑張りを認め合ったからだと考える。また、振り返りで相互評価を行い、タブレットに記録した写真を活用したり、一人一人の具体的な活躍の場面を認め合ったりしたからだと考える。「教師サポート」が高まったのは、若年教員Aも帰りの会で児童の頑張りを紹介して、具体的に価値づけをしたからだと考える。「生活満足感」が上昇したのは、進捗状況の報告や相互評価を行い、友だちからの支援があり、認められている等、友人関係が良好であると感じている児童が増えたからだと考える。また、友だちとの関係をつくるスキルをもっていると感じている児童が増えたからだと考える。

③児童の振り返りカードをA Iテキストマイニング(株式会社 UserLocal)で分析した結果より

図2より、児童の振り返りカードの記述内容をA Iテキストマイニングで分析した結果、「やり遂げる」「関わり」「話し合う」「いろいろ」「まとまり」「深まる」「出し合う」のキーワードに関連性が見られた。具体的な記述では、「学級会で話し合ったことをみんなで力を合わせてやり遂げようとしたから、まとまりがでてきた。」「係の中でいろいろなアイディアを出し合ったり話し合ったりすることができた。」「自分たちの力で進めることができ、たくさんの人と関わることができた。」等があった。これは、若年教員Aが、実践が一番大切で、児童が一番伸び活躍できるということを理解したからだと考える。また、児童に「何のために行くか？」を日常的・継続的に意識させたことで、実践意欲の向上に繋がったからだと考える。

#### ④若年教員Aの記述アンケートより

表5より、若年教員Aの自発的、自治的な活動を中心とした学級経営力が高まった。これは、児童の力で学級の課題を見付け、取組を考え、実践させるために、タブレットを活用して学級目標の現状分析をさせたり、具体的な内容や係を学級会で決めさせたりして、児童の問題意識を高めたからである。また、進捗状況報告を毎日の帰りの会で行わせたことや「笑顔いっぱい週間の取組」の振り返りで係ごとの相互評価を行ったことで、児童の学級への所属感や連帯感を高めたからである。

#### (5) 研究Ⅰの成果と課題

##### ①成果

コンサルテーションⅠを位置付けたことで、若年教員Aは学級会の基本的な流れを理解することができた。また、学活(1)の学習過程を確認し、指導の見通しをもつことができ有効であった。その結果、児童は問題意識をもって学級会に臨み、笑顔いっぱい週間の内容や役割を決めることができた。

コンサルテーションⅡを位置付けたことは、若年教員Aが実践の大切さを理解し、係ごとの進捗状況報告を毎日の帰りの会で設定することとなり有効だった。その結果、児童は自分たちの係の仕事が学級のみんなから認められるようになり、実践意欲を高めた。

コンサルテーションⅢを位置付けたことは、若年教員Aが児童一人一人の頑張りと努力が認められるために、振り返りで係ごとの相互評価を行うこととなり有効だった。その結果、児童は自分のよさや頑張りを認められ、友だちの輪が広がった。

学活(1)の学習過程で行った3箇所のコンサルテーションは、若年教員Aの学級会に対する指導

力を高め児童の学校適応感の向上に繋がった。

##### ②課題

学級の諸問題を解決する学級会を計画的に行い、実践して振り返ることで学級がレベルアップする経験を積み重ねる必要がある。そのためには、「丁寧な児童理解」や「学級担任と児童との信頼関係」による「学級の基盤づくり」が重要である。これは、一朝一夕でできるものではなく、学級担任の日常的・継続的な指導が大切である。

表4 ASSESSの6因子の平均点の変容

| 因子名     | 平均<br>標準偏差 | 時期             |                |
|---------|------------|----------------|----------------|
|         |            | コンサル<br>テーション前 | コンサル<br>テーション後 |
| 生活満足感   | M<br>SD    | 3.43<br>0.98   | 3.83<br>0.89 * |
| 教師サポート  | M<br>SD    | 4.03<br>0.92   | 4.48<br>0.55 * |
| 友人サポート  | M<br>SD    | 3.59<br>1.04   | 4.22<br>0.83 * |
| 向社会的スキル | M<br>SD    | 3.48<br>0.96   | 3.93<br>0.65 * |
| 非侵害の関係  | M<br>SD    | 4.21<br>0.89   | 4.39<br>0.73   |
| 学習の適応   | M<br>SD    | 3.47<br>1.00   | 3.61<br>1.02 * |

N=35 注1 Max=5, Min=1 注2 \* $p<.05$ .

図2 A Iテキストマイニングの結果

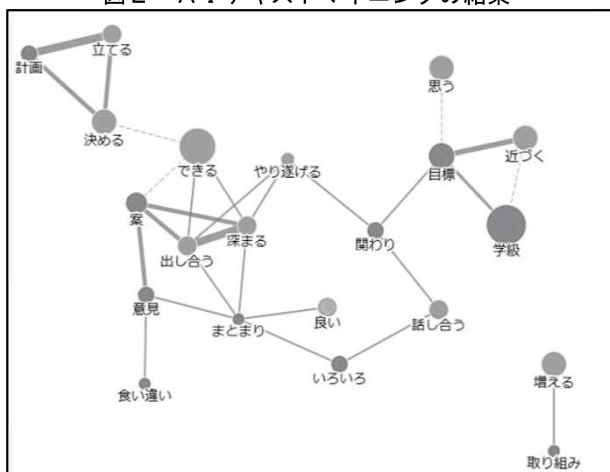


表5 若年教員Aの記述アンケート

高学年の学活(1)の指導で、「子供たちの力で」「実践が一番大切」というキーワードがとても印象に残った。これまでは、学級会を行うことで精一杯だったが、学級会は通過点だという意識に変わった。学級会は、子供たちの力で進めることができた。デジタルコンテンツで、基本的な流れを復習したり計画委員会の指導として、シミュレーションをしたりしたからだと思う。帰りの会での係ごとの進捗状況の報告では、回数を重ねるごとに子供たちが計画的に係の仕事を進めている様子やインタビューをしたり動画を撮影したりする等の工夫がたくさん伝わってきた。また、今、悩んでいることを報告する係がでてきた。このような報告を毎日積み重ねていたから、相互評価でもすぐにお互いの頑張りと努力を認めることができたと思う。意欲的に取り組めたのは、4月に学級のみんなで決めた学級目標の現状を分析したから、自分事として考えることができたと思う。

次年度は、昨年度の成果と課題を踏まえ、上記の「1 問題と目的」の(5)具体方策に、⑥として学級生活の基盤づくりのために「朝の会と帰りの会の研修」を加える。具体的には、2年目となる若年教員に4月の放課後の時間を活用し、1週間の朝の会と帰りの会の時間の合計が100分あることを確認し、意図的・計画的な指導が児童の成長に繋がることを理解させる。また、2年目となる若年教員の朝の会や帰りの会を定期的に参観し、「規律に関する指導」や「他者を思いやる指導」、「児童を称賛する指導」を中心に通信にまとめ、それぞれの指導のよさを共有することとする。また、⑦として学活(1)の学習過程を確認し、指導の見通しをもつために「プランニングシート（協田2019）の活用」を加える。

### 3 研究Ⅱ

#### (1) 目的

報告者が若年教員B・C・Dの学級経営力の向上を目指した児童の自発的、自治的な活動の指導に関するコンサルテーションを行い、児童の学校適応感の「友人サポート」や「向社会的スキル」、「非侵害的関係」の向上とコンサルテーションの効果・学級経営力の向上を明らかにする。

#### (2) 方法

①研究期間 20XX年4月～20XX年12月

②研究対象 第5学年X組32名及び若年教員B  
第5学年Y組33名及び若年教員C  
第3学年X組32名及び若年教員D

課題演習報告書では、若年教員Bの反応・学習・行動を示すこととする（表6）。

③測定内容 表1を参照

(3) 研究の実際（表6参照）

表6 「前期前半のまとめの会」におけるコンサルテーションⅠ・Ⅱ・Ⅲの内容、若年教員Bの反応・学習・行動

|    | コンサルテーションⅠ   | コンサルテーションⅡ   | コンサルテーションⅢ  |
|----|--|--|---|
| 内容 | ①若年教員Bの実践的指導力を把握するために「学級会セルフチェックシート」の実施<br>②指導の見通しをもつためにプランニングシートの作成<br>③児童の学校適応感を把握するため、ASSESS（取組前）の結果を共有<br>④学活(1)の基本的な進め方を理解するために、「学級会デジタルコンテンツ」で確認   | ①児童の実践意欲を高めるために、係ごとの進捗状況を報告することの提案<br>②児童が係の仕事を計画的に行うために、係ごとの活動計画書を立てさせることを提案<br>③学校適応感が低かった児童の強みやよさを生かすために、どのような場面でどのように発揮させるかを確認   | ①自分や仲間の頑張りを認め合うために、係ごとに相互評価を行うことを提案<br>②学級の成長を共有するために、学級が成長したと思うことを自由記述させることの提案   |
| 反応 | <ul style="list-style-type: none"> <li>学活(1)の指導は、昨年度は学級会を3回やったが振り返りまでは丁寧に行ってはいないので、挑戦してみたい。</li> <li>学活(1)の学習過程が理解でき、学級会の基本的な流れや指導の見通しがもてて満足だ。特にどんな係が必要なのか事前に考えることができたのがよかった。</li> <li>ASSESSの結果を一緒に確認したことで、学校生活や仲間とのかかわり方に課題がある等、自分の見えていないことが理解できて満足だ。</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>進捗状況の報告をするという指導を、今までしてこなかった。係活動が活発になりそうだ。</li> <li>ASSESSの結果を再度確認したり、児童の係活動における活躍の場を考えたりすることができて満足だ。</li> <li>工夫をたくさん出させたいので、意見を言いやすい雰囲気や学級のみんなでつくっていくことを意識的言っていきたい。</li> </ul>                           | <ul style="list-style-type: none"> <li>係ごとの相互評価を今まで行ったことがない。教員が知らなかった児童の活躍が発見できそうだ。</li> <li>今まで、学級が成長したことを書かせることがないので挑戦してみたい。</li> <li>学校適応感が低かった児童の頑張りの、しっかり認められる場にしていきたい。</li> </ul>               |
| 学習 | <ul style="list-style-type: none"> <li>学活(1)の学習過程では、実践が一番大切で児童が一番伸びるし活躍できるのだ。</li> <li>自発的・自治的な活動を充実させるために、児童に任せることを多くして、活躍の場を与えていきたい。</li> </ul>  | <ul style="list-style-type: none"> <li>進捗状況を報告させることで、児童に見通しと意欲をもたせることができる。</li> <li>「前期前半のまとめの会」に向けての係ごとの準備で児童の活躍の場を保証する。</li> <li>学級の雰囲気を、更に支持的風土のあるようにするために、学級目標に定期的に立ち返るようにする。</li> </ul>   | <ul style="list-style-type: none"> <li>一人一人の頑張りのや努力を認めるために、相互評価を行う。教員も児童の活躍にきづくことができる。</li> <li>一人一人の頑張りのや努力で学級が成長したことを実感させるために、学級が成長したことを記述させて、学級のみんなで成長を喜び合う経験が大切である。</li> </ul>                    |
| 行動 | <ul style="list-style-type: none"> <li>計画委員会に学級会当日のシミュレーションを2回程度行わせた。</li> <li>学級会の提案理由を若年教員Bが語っていた。</li> <li>報告者からの助言により、児童の自発的、自治的な活動にするために、児童に提案理由を語らせるようにした。その際、学級の現状や学級目標、実践後のイメージを語らせるようにしていた。</li> </ul>  | <ul style="list-style-type: none"> <li>係ごとの進捗状況の報告を帰りの会で毎日行ったが、あまりうまく行かなかった。</li> <li>係ごとの活動計画を立てさせ、若年教員Bも一緒に確認した。その際、「前期前半のまとめの会」までの日数や活動できる休み時間等を中心に確認した。</li> <li>定期的に学級目標に立ち返った。</li> <li>ASSESSの結果が低い児童に対しては、係活動中の頑張りをしっかり認めていた。</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>教員も児童も一人一人のよさを理解するために、個人で振り返りをさせた後、係ごとに振り返りを行わせ相互評価を行い、互いのよさや頑張りを称え合わせた。</li> <li>学級会で決めたことをみんなで実践し、学級がレベルアップすることを共感するために、学級が成長したことの記述を全体で交流し共有させた。</li> </ul> |

## (4) 研究Ⅱの結果と考察

## ①コンサルテーションの効果

## ア コンサルテーションⅠ

反応段階で若年教員Bは、「学活(1)の学習過程が理解でき、学級会の基本的な流れや指導の見通しがもてて満足だ。特にどんな係が必要なのか事前に考えることができたのがよかった。」と答えている。「学級会セルフチェックシート」での自己評価をもとに、学活(1)の学習過程を理解するために、プランニングシートを一緒に作成したことが効果的だったからだと考える。学習段階で若年教員Bは、「児童に任せることを多くして、活躍の場を与えていきたい。」と答えている。これは、若年教員Bが、児童が中心となって学級をよりよくする自発的、自治的な活動の教育的な意義を理解したからだと考える。行動段階で若年教員Bは、提案者との打ち合わせの際、学級の現状や学級目標、実践後のイメージを提案理由に盛り込むように指導した。それにより、提案理由が児童にとって学級会で話し合う時の根拠や合意形成の道筋になっていたことを若年教員Bも実感していた。このことから、報告者が若年教員Bに行ったコンサルテーションⅠでは、学活(1)の学習過程を理解させ、今後の指導の見通しを持たせることができたと考える。

## イ コンサルテーションⅡ

反応段階で若年教員Bは、「進捗状況の報告をするという指導を今までしてこなかった。係活動が活発になりそうだ」と答えていたことは、進捗状況を報告させることで児童の意欲も高まることに気付いたからだと考える。学習段階で若年教員Bは、「学級の雰囲気をもっと支持的風土のあるようにするために、学級目標に定期的に立ち返るようにする。」と答えた。これは、若年教員Bが、学級目標である「全力・善力・前力」に迫るために、意図的・計画的な指導の大切さを理解したからだと考える。行動段階で若年教員Bは、係ごとの活動計画を立てさせ、若年教員Bも一緒に確認した。その際、「前期前半のまとめの会」までの日数や活動できる休み時間を中心に確認した。これは、児童に計画的に準備をさせることの大切さを理解したからである。このことから、報告者の若年教員Bに対するコンサルテーションⅡにより、自発的、自治的な活動に対する適切な支援を若年教員Bが行うことで、児童の実践意欲を高めることができたと考える。

## ウ コンサルテーションⅢ

反応段階で若年教員Bは、「係ごとの相互評価を

今まで行ったことがない。教員が知らなかった児童の活躍が発見できそうだ。」と語っている。これは、若年教員Bが相互評価のよさを感じているからだと考える。学習段階で若年教員Bは、「一人一人の頑張りと努力で学級が成長したことを実感させるために、学級が成長したことを記述させて、学級のみんなで成長を喜び合う経験が大切である。」と答えた。これは、若年教員Bが、児童一人一人の頑張りが学級の成長に繋がることを理解したからだと考える。行動段階で若年教員Bは、個人で振り返りをした後、係ごとに相互評価を行い、最後に学級が成長したことを出し合わせ共有した。これは、若年教員Bが児童自身に自分の多様なよさに気付かせたり、一人一人のよさを発揮することで学級の成長につながったりすることを学級全体に共有することの大切さを理解したからだと考える。このことから、報告者が若年教員Bに行ったコンサルテーションⅢでは、振り返りの内容と方法を理解させることができたと考える。

## ②ASSESSの結果の変容より

表7より、ほとんどの因子で高まりが見られた。それぞれの結果の差異を比較するため、対応のある $t$ 検定を行ったところ、「非侵害的関係」に有意差がみられた。これは、学級会で決めたことの実践を大切にしたからだと考える。3人の若年教員は「集会活動」に取り組んだが、係ごとに活動計画を立て活動後に相互評価をさせたことで、児童同士が協力したりお互いのよさを認め合ったりすることができたからだと考える。5年X組の「教師サポート」が下がっていた。これは、若年教員Bが係ごとの活動計画を立てさせる際に児童に任せて考えさせる時間を多く設定したが、活動計画の立て方や書き方の具体的な指導がなく、児童が活動の見通しをもつことができなかったからだと考える。

表7 ASSESSの6因子の平均点の変容

| 因子名     | 平均<br>標準偏差 | 学級<br>時期           |                    |                    |                    |                    |                    |
|---------|------------|--------------------|--------------------|--------------------|--------------------|--------------------|--------------------|
|         |            | 5年X組               |                    | 5年Y組               |                    | 3年X組               |                    |
|         |            | コンサル<br>セッション<br>前 | コンサル<br>セッション<br>後 | コンサル<br>セッション<br>前 | コンサル<br>セッション<br>後 | コンサル<br>セッション<br>前 | コンサル<br>セッション<br>後 |
| 生活満足感   | <i>M</i>   | 3.92               | 4.02               | 3.83               | 4.19 *             | 3.60               | 3.94               |
|         | <i>SD</i>  | 0.70               | 0.67               | 0.96               | 0.88               | 1.14               | 0.88               |
| 教師サポート  | <i>M</i>   | 4.29               | 3.86 *             | 4.33               | 4.39               | 3.53               | 3.56               |
|         | <i>SD</i>  | 0.62               | 0.87               | 0.71               | 0.68               | 1.40               | 1.44               |
| 友人サポート  | <i>M</i>   | 4.06               | 4.22               | 4.07               | 4.24               | 3.72               | 3.98               |
|         | <i>SD</i>  | 0.94               | 0.78               | 0.76               | 0.71               | 1.10               | 1.03               |
| 向社会的スキル | <i>M</i>   | 4.00               | 4.07               | 3.90               | 3.95               | 3.70               | 3.65               |
|         | <i>SD</i>  | 0.78               | 0.74               | 0.83               | 0.76               | 1.00               | 0.96               |
| 非侵害的関係  | <i>M</i>   | 4.10               | 4.50 *             | 3.90               | 4.20 *             | 3.50               | 4.10 *             |
|         | <i>SD</i>  | 0.71               | 0.57               | 0.89               | 1.06               | 1.11               | 0.62               |
| 学習的適応   | <i>M</i>   | 3.82               | 3.74               | 3.78               | 3.87               | 3.43               | 3.79 *             |
|         | <i>SD</i>  | 0.86               | 0.81               | 0.97               | 1.17               | 1.14               | 1.00               |

*N*=32 注1. *Max*=5, *N*=33 注1. *Max*=5, *N*=32 注1. *Max*=5,  
*Min*=1 注2. \* $p$ <.05, *Min*=1 注2. \* $p$ <.05, *Min*=1 注2. \* $p$ <.05,

